

平成26年度 鳥取県立農業大学校評価システムシート(H26.8.18)

評価基準（達成度）

- A 100%以上達成
- B 80～99%達成
- C 60～79%達成
- D 40～59%達成
- E 39%以下の達成

重点目標		新規就農者の円滑な就農の支援 1個別経営計画作成のための個別指導強化 2農業法人等の求人情報収集と関係機関との連携による自営就農及び雇用就農の支援強化						
課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
1	新規就農者の育成	1 H25年度卒業生は、22名中、自営就農2名、雇用就農9、農業関連企業団体就職7、一般企業就職2、未定2。 2 近年、法人や個人農家からの求人が増えており、学生の雇用就農割合（H21から25年度）も14、24、37、48、41%と増えている。 3 在校生の実家は、専業農家18%、兼業21%、非農家61%。 4 全体的に雇用就農の求人に対する学生の反応が遅い。 5 自営の新規就農については、青年就農給付金や経営計画等に係る支援について個別の事情に沿って対応している。	1 求人・求職者情報の農業法人等との共有による雇用就農の促進 2 自営新規就農希望者の就業計画作成支援など就農の促進	1 関係機関との情報共有を進め、雇用就農を促進する。 ・農業改良普及所等関係機関への雇用就農を希望する学生の情報提供 ・農業法人及び法人就農者訪問等による農業法人情報の収集 ・農業法人及び雇用予定農家との意見交換会の開催 ・進路（就農）意識の醸成のための1年次農家実習及び面談の複数回実施 （評価指標） ・学生求職者数を上回る求人情報の収集 ・学生の就農率 50%以上 2 自営新規就農希望者全員の就業計画作成を支援する。 （評価指標）青年等就業計画作成と認定				
2	学生の確保	1 少子化等により高校の生徒数が減少し定員の確保が困難になっており、入学生数は平成23年度以降、定員割れが続いている。 2 H22～26年度の入学人数は、33、26、26、25、23名。	1 学生募集活動 2 農大情報のごまめな発信	1 オープンキャンパス(3回開催)、高校の教員を対象とした農大説明会の開催と高校訪問、高校生保護者へのPR（学生募集チラシ等の配布）を実施する。 2 農大市等のイベント実施による一般県民の農大認知度アップを図る。 3 農大の日々の様子をリアルタイムでホームページに発信する。 4 各農業改良普及所への入学候補者の照会する。 （評価指標）学生入学人数 定員の30名以上				
3	学生の営農技術向上	共通（または総括） 1 昨年度、全学生（43名）を対象に専攻実習に関する理解度や日々の生活態度等を自己評価するための「理解度アンケート」を実施した。この自己評価を踏まえて、職員の評価を記載し個別面談等で提示する事により互いの共通認識としている。今後も学生個々の状況に応じた個別指導に有効活用する必要がある。 2 農大市等の販売実習を通して、栽培だけでなく経営や流通販売を体系的に学ぶ事ができる点が本校の特色である。対面販売を行う事で、消費者の反応をリアルに感じ、この事が学生のモチベーション向上に繋がるものであり、今後も継続して実施する必要がある。	1 学生個々の状況に応じた個別指導の充実 2 販売実習による経営感覚の習得と学習意欲の向上	1 「理解度アンケート」を実施し、学生と職員の共通認識を図るとともに、特に学生の苦手分野を強化するための指標として活用する。 （評価指標） ・レベルアップ状況の個別評価確認（全学生44名対象） 2 販売物のポップの作成、陳列の工夫、試食、売場の装飾等、農大産農産物や農大をより多くの人に知ってもらうためのPR方法を学生が中心となって検討する。 （評価指標） ・農大市PRポスター、チラシ作成及び掲示、配布（ポスター：20枚/回*5回 チラシ：2000枚/回*5回） ・販売物のポップ作成 ・包装方法、POP作成等、販売物PRの工夫 ・農大市来場者へのアンケート実施				
		【果樹】 2年間の限られた期間で、果樹の栽培管理に係る知識、技術の習得を図るためには、職員の指示待ちではなく、学生が主体となったほ場運営を図る必要がある。また、具体的な目標を掲げることにより、学習意欲を高め、更なるレベルアップを目指す必要がある。	1 ほ場管理に係る学生の主体的取り組み 2 ナシ新品種を中心とした栽培技術の向上	1 各樹種の主査（2年）が、管理作業前に、目的や方法を説明することで、各学生の責任感と主体性の向上を図る。 また、二十世紀梨については、全学生の担当樹を決め、年間の管理作業を各自の責任で行わせる。 （評価指標） ・各主査（2年）による作業前説明の実施 ・栽培管理の実施と実績記録 2 ナシコンクール（ナシ記念館主催）の入賞を目標とするとともに、新甘泉等のナシ新品種を題材としたプロジェクト学習に取り組み事により県主要品種の栽培技術の習得及び向上を図る。 （評価指標） ・コンクール入賞 ・ナシ新品種を題材としたプロジェクト学習の実施				

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
		<p>【野菜】</p> <p>普通科高校出身や非農家の学生がコースの大半を占めており、農業に関する基礎技術及び知識の習得を進めている。</p> <p>一方で将来的な独立就農を目指す学生もおり、実習のレベルや規模を充実させることも重要である。</p> <p>さらに、六次産業化や有機栽培技術への関心も高いことから、多様なニーズに対応した実習を行う必要がある。</p>	<p>1 栽培基礎技術の向上とニーズに対応したプロジェクト研究の実施</p> <p>2 農業技術検定取得の促進</p> <p>3 環境保全型農業（特裁・有機）の理解と実践</p>	<p>1 1年生は露地栽培での少量多品目栽培および施設での共同管理を行い、栽培の基礎技術を習得させる。2年生はプロジェクト研究において、各自の興味や実情に合わせた課題設定を行い、主としてハウス1棟を1人で管理する。 （評価指標） ・栽培品目 露地5品目/人 施設1品目/人 ・就農を目指す学生は県特産品目の白ネギ、フロッコリーを規模を拡大して栽培 ・トレーサビリティ（栽培管理履歴）記帳の実施</p> <p>2 農業知識の習得のため、農業技術検定の取得を行う。 （評価指標） 1年次終了までに3級、卒業までに2級の取得</p> <p>3 有機栽培実習と、鳥取県特別農産物の認証を受けた栽培を実施する。 （評価指標） 有機専用圃場における実習（15品目/年） 特裁認証（5品目）</p>				
		<p>【花き】</p> <p>基礎技術の習得を進めているが、実用化された新技術や本県に適する新品目を導入し、さらに栽培技術の向上を図る必要がある。また、新技術の経営的評価を行い、理解させる必要である。さらに、装飾、展示技術の教育は行われておらず、学生のニーズであるこれらの技術習得を図る必要がある。</p>	<p>1 省エネ型ハウスを始めとする新技術の導入</p> <p>2 新品目・品種の試作と評価</p> <p>3 装飾、展示技術の向上</p>	<p>1 省エネ技術として二重空膜ハウスを導入し、技術的、経営的評価を行う。また、鳥取大学と県が共同で実施する植物のEOD反応を活用した技術について現地実証展示ほの1つとして参加し、技術組み立ての一翼を担う。 （評価指標） ・新技術の導入状況とその効果確認 ・県の花き部会等の現地視察を受け入れ、また、担当学生が説明する</p> <p>2 新品目等の試作と技術的、経営的評価を行う。 （評価指標）新規品目等の導入状況</p> <p>3 各種イベント、農大市等の販売実習で展示、並びに農大入学式、卒業式などでの玄関装飾などを積極的に行い、装飾展示技術の向上を図る。 （評価指標）装飾、展示の内容とその回数</p>				
		<p>【作物】</p> <p>トラクター、田植機、コンバイン等の機械操作は未経験の学生がほとんどである。 有機栽培に漠然とした興味を持って入学する学生が多いが、具体的な栽培管理は未経験である。 法人就農を目指す学生も多く、水田農業の複合経営で取り入れられることが多い白ネギやフロッコリーの栽培技術の習得も必要である。</p>	<p>1 農業機械操作技術の習得</p> <p>2 有機栽培の取り組み強化</p> <p>3 白ネギ、フロッコリーの栽培技術習得</p>	<p>1 農大の管理ほ場面積を増やすほか、近隣農家から機械作業実習ほ場の提供を受け、水田での作業面積を確保する。また、トラクターでの耕耘技術競技を実施し、技能向上を図る。 （評価指標） (1)トラクター、田植機、コンバインの作業量を前年並みに確保する 目標値：トラクター 150hr 田植機 300a コンバイン 58hr (2)耕耘技術競技の実施</p> <p>2 有機栽培技術導入ほ場を増やす。 （評価指標）有機栽培技術導入ほ場 2ほ場→3ほ場</p> <p>3 白ネギ（秋冬）、フロッコリー（秋冬）を栽培する。 （評価指標）栽培面積の増加 目標値：白ネギ150㎡、フロッコリー200㎡</p>				
		<p>【畜産】</p> <p>1 畜産において、非農家出身学生が多数を占める状況では、卒業即自営畜産経営は難しいため、将来的自立も見据えながら畜産関連業種又は農業法人就農に大きく力を入れる。 2 畜産関連業種又は農業法人で求められる人材とは、家畜（牛）の基本的管理技術を習得した人材であり、本学の学生には、牛の取扱いに主眼をおいた飼養管理技術が求められている。</p>	<p>1 就農または農業法人への就職者数</p> <p>2 各共進会への出品及び上位入賞</p>	<p>1 畜産関連業種又は農業法人、先進農家との積極交流（訪問、夏期研修等）による就職マッチングを行う。 （評価指標）畜産関連業種又は農業法人等就職者数（自立就農者）</p> <p>2 乳牛および和牛の共進会参加し、飼養管理技術の習熟（業界の求める人材育成）を図る。 （評価指標）共進会参加率及び優等賞率</p>				
		<p>【農業機械】</p> <p>1 農業機械の仕組みと操作についての知識や安全意識の低い学生が見受けられる。 2 農業法人等からも農業機械操作技術のレベルアップを求める意見がある。 3 運転操作を誤り学校内で作業機を破損する学生も一部見受けられる。</p>	<p>1 機械知識、操作の習熟度</p>	<p>1 農業機械の知識・操作技術の習得と農作業安全の意識啓発を図る。 ・講義、ビデオ視聴 ・大型特殊免許取得の運転操作練習 ・各専攻での実習を通じての作業機の運転操作 （評価指標）学生個別の習熟度評価&目標シートの作成と学生本人への提示</p>				

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
4	社会情勢に即応した実践教育の実施	<p>1 農業現場に即したプロジェクト活動（卒論）の課題設定と、実用技術を意識した取り組みを進めている。</p> <p>2 5年度の成果のうち実用性が高いと判断されたスイカの成績1件を普及員の調査研究活動発表の場で情報提供し、評価を受けた。これ以外にも参考資料としてナシの成績1件を普及所の求めに応じて情報提供した。</p> <p>2 1・2年とも講義の履修内容として地域貢献活動（ボランティア）を位置づけている。</p>	<p>1 実用性の高いプロジェクト成果の確保</p> <p>2 地域社会との関わりの促進</p>	<p>1 実用性を意識した課題設定と実施に努め、学生が就農後に活用でき、生産現場のニーズにも応えられる成果を確保する。 （評価指標）校内発表会以外の情報提供の場を3件以上確保する。</p> <p>2 引き続き地域貢献活動の情報を収集して学生に提示し、取り組みを促す。 （評価指標）学生による地域貢献活動（1人2回）の実施率率100%</p>				
5	研修生の栽培技術・経営能力の向上と就農の円滑化	<p>1 研修生共通カリキュラム（現地視察研修、OB訪問研修、土壤肥料・病害虫・経営計画作成講義、機械・農産加工実習）の評価は、○以上が90%以上と高い。</p> <p>2 若い研修生の中には、就農に対する意識が低く、経営計画の作成が進まない場合もある。</p> <p>3 研修生の募集及び円滑な就農のためには関係機関との連携と情報の共有化が必要である。</p>	<p>1 評価アンケート</p> <p>2 農家派遣研修及び経営計画</p> <p>3 相談会</p> <p>4 就農率</p>	<p>1 研修科共通カリキュラムについて研修終了時の評価アンケート（4段階評価 ◎、○、△、×）を実施する。 （評価指標）○以上の評価 90%以上</p> <p>2 就農に対する意識づけのための農家派遣研修を実施するとともに、個別指導による経営計画の作成支援を行う。 （評価指標）農家派遣研修実施者 5名 経営計画完成者 80% ※対経営計画必要者（研修終了時）</p> <p>3 従来、募集チラシのみの配布であった「若者仕事ブラザ」等で新たに相談会を実施する。 （評価指標）実施回数 2回</p> <p>4 研修終了後の就農率を高める。 （評価指標）就農率90%以上</p>				